

明代チベットの八大教主について〔中〕

佐藤長

〔略語表追加〕

蔡論集||于道泉「譯註明成祖遣使召宗喀巴紀事及宗喀巴覆成祖書」慶祝蔡元培先生六十五歲論文集」下冊、北平、民國二十四年。

橋本||橋本光實譯「蒙古喇嘛教史」東京、昭和十五年。

ヴァンヤン|| Vaidurya ser po, edited by Lokesh Chandra, Pt. 1, New Delhi, 1960.

シタマ|| Higgs med rig pahi rdo rje, Hor chos lbyun, edited by Georg Huth, Strassburg, 1892.

ポチヤセルヤ|| Po ti bse ru.
VS|| ヴンイヤン

PTSR|| ポライセルッ

六

第三は大慈法王の釋迦也失 si tga ie si であるが、そ

の名は當然 *Galpa ye ces* と還元される。この法王は永樂十二年に來朝したが、「禮は大乘法王に亞いた」といふ(明傳)。蒙古源流には“*saskiya yin yeke asaranggoi bsančan 'orji*”と出しており、^⑨普通に解すれば、「サキヤノの大慈の Byams chen chos rje」と譯ゆるべきであらう。一方シグメを見るとツォンカン Tson kha pa の弟子にシヤムチエンチョエシエ Byams chen chos rje なるものがおり、シャーキヤンシー Galpa ye ces の名を有して、これが中國に遣わされたことになっている。于道泉氏は衛藏通志卷六寺廟志に、

拉撒北十里色拉山、宗喀巴色拉曲頂居住之時、觀其地可建廟、其弟子甲木慶曲結沙克伽伊哥、明時入中國、爲禪師、賜物甚盛、回藏後、宗喀巴命其在色拉建立大寺。

とあるのを引いて、セラ寺 *Se ra chos sdins* (*Se ra theg chen glin*) を創設した、ツォンカバの弟子ジャムチェン チョエジュ・シャークヤインシーが明史、明實錄の釋迦也失であるといつている(蔡論集九五頁註)。尤もこのことは既に沈曾植が蒙古源流箋證卷五で同じ衛藏通志の文を引いて述べているところで、于氏の新しい發明ではない。蒙古源流がジャムチェンをサキャバの大慈某と記したのはシャークヤインシーの名から自由に想像を走らせたもので、完全な誤である。箋證の注では、この僧は初はサキャバであつたのをツォンカバに従つて改宗したものであらうといつているが、これも別に根據のあることではなく、原文の *saskya yin* から想像を逞うしたといふべきであらう。

とにかく釋迦也失がツォンカバの弟子シャークヤインシーであり、従つてゲルグバの僧侶であることははや疑ないが、當時ツォンカバは未だ在世中であり、當然彼が明廷に招請されるべき筈であるのに、何故弟子のシャークヤが入朝したかが問題となる。この疑問に對して于氏はチベット文獻中より、ツォンカバが成祖の度々の招請を強く辭退した史料を若干摘出し、その事情を明かにしている(蔡論集九

三九頁)。即ちチャハルラマ全書のうちのツォンカバ傳によると、ツォンカバは「このとき中國に行つても何の利益もなく、寧ろチベットに留まつていた方が教が永く広まり、結局チベット、モンゴル、シナに大きな利益が生ずる」と見なしていたとあり(前掲書九四三頁)、確に次いで掲載せられたツォンカバの成祖への復書を讀めば、そのことは感得される。しかし同書には、彼が中國の使節に對して、「中國に到るには路程が長く、身體が持たない等の多くの障害があり、行つても佛法と衆生に大して利益はない」といつたことを述べており(前掲書)、この方が充分我々には納得できる。ツォンカバが成祖に送つた入京辭退の手紙の日付は「鼠の年六月十九日」になつており(前掲書九四七頁)、于氏はこの鼠の年を永樂六年戊子と見ているが、これは中國文獻と比較して誤ないものと見ることができ

きる。尚このときの使者が誰であつたかは明かでない。ツォンカバは成祖への返書とともにゴンターシン *Gon tha bshin* なるものに書を與えているが、于氏の掲げているテキストには *Gon tha bshin* なる綴字もあり、何れが正しいか決

定できない。于氏はこれを「鞏大人」と音譯しているが、當時チベットに使したものに鞏姓のものはいない。ゴンは姓ではなくて「朝廷(の)」という意味で、手紙そのものは朝廷の最高の大官に宛てたものに過ぎないのではないかとにかく永樂の初期には侯顯がペンデンタシー Dpal Idan bkra cis とともに元年に出発して四年にデシンを伴い歸つたことが明かなだけで、ツォンカバ招請のことは全く中國側の記録にはない。恐らく于氏のいうごとく天子の招請が拒絶されたというので史官が記録を抹殺してしまつたのは事實であろう(前掲書九四〇頁)。岩井氏もこの考えに賛成していられる。

ツォンカバ自身は來朝しなかつたが、代りに彼は弟子のシャークヤイシーを天子の下に派遣した。シャークヤがツォンカバの代理であることも中國文獻では全く書していない。しかしチベット文獻ではヴァイセルに(VS, p. 118)、ジャムチェンチョエジュ・シャークヤイシーは……ジャムゴン・ツォンカバの側近のラマとしてこれに任せ、シナの王タイミン Tai min (大明、成祖)の大師寶者(ツォンカバ)を迎えんと使者を送りたる時に、代

理として法王シャークヤイシーは遣されたたり。とあり、ジグメも同様のことを述べている(橋本二一頁)。ジグメは續いてジャムチェンがリタンを經、成都に至り、更に南京に向つたという(前掲書)。しかし清涼志卷八釋迦也失傳に、

永樂十二年春、始達此土、棲止臺山顯通寺、冬十一月聞於上、遣太監侯顯、詔至京入内、預勅免拜、賜座大善殿、應對稱旨、上大嘉嘆、勅安能仁方丈。

とあるのを見るのを見ると、一旦は五臺山に駐留したらしい。顯通寺は前にデシンの駐錫したところである。五臺山に來たのを知つて、成祖が侯顯を遣して入内せしめたというのは、もともとジャムチェンが正式の招聘を受けていなかったため、形式を整える上からの處置であろう。

彼の入朝は明傳によつても永樂十二年であるが、實錄のこれに對應する記事は全くない。今右の清涼志によつてのみ同年の冬十一月以後であることが知られるのである。而して翌十三年四月には、妙覺圓通慧慈普應輔國顯教灌頂弘善西天佛子大國師を命ぜられ(史料六五頁)、十四年五月には京師を出發して歸國した(史料六六頁)。ヴァイセルに

は (VS, p. 118)'

タイバウハーワン Taih bahu hwa wan 即ち大慈法王
Byams chen chos kyi rgyal po の御名を奉られたり
……シナ國においてハイエンシ Ha yan si とごう寺院
を建てられたり。

とあるが、タイバウハーワンでは大實法王と還元されるから誤である。ハイエンシはジグメも同様の名を出しており。橋本氏は妙舟の蒙藏佛教史によつて「法淵寺」fa yen si を比定している(橋本二二頁)。而して氏は更に妙舟の説を引き、法淵寺は嵩祝寺内東部にある寺院で明代の番廠のあつたところといつてゐる(前掲書二一五頁註九)。

尚ジグメによればジャムチェンは進んで五臺山に至つたが(前掲書二二三頁)、彼が明廷を離れたのは右のごとく十四年五月であり、この後五臺山へと向つたのであろう。

清涼志卷八釋迦也失傳にも、

無何辭上、入臺山。

といつてこのことを證明する。

ところでジャムチェンがセラ寺を創設したのは、ワッデル A. Waddell によれば一四一七年(永樂十五年)であ

るが^⑤、これでは彼が明廷から退出した翌年になる。しかしヴァイセルには (VS, p. 118)'

己亥の年にセラテグチェンリンの大教學部 Chos grwa chen po を建てたり。

とあるから、己亥の年即ち一四一九年(永樂十七年)と見るのが正しいのであろう。彼はセラではアティシヤ系の時輪 Dus khlor kalacakra の講義を行つたとジグメ等はいうが(橋本二二三頁)、ジャムチェン自身はセラ寺に何等教本 yig cha を残してゐないといわれているから、彼がこの寺院を作つたことは確でも、彼の學問がこの寺院を作つたことにはならないであらう。又中國で宣教に活動したことをヴァイセル、ジグメともにいうが、前述の法淵寺の建立以外にはその現實は明かでない。

七

その後ジャムチェンは永樂十五年(史料六七頁)、二十一年(史料七一頁)、宣徳六年と遣使入朝したが、宣徳九年(一四三四)には再び自ら入朝した(明傳)。ヴァイセルには (VS, p. 118)'

シャムゴン法王（ツォンカパ）の逝かれたる後、再びシナに招請せられたり。時に大明皇帝（成祖）の御子宣德帝 *Zon-te* 王位に即きたりしが、御父の風を正しく傳えられ敬禮を盡されたり。

とあるが、ツォンカパの死後であるから、今度は彼自身の意志で招聘に應じたものであろう。實錄には宣德九年六月庚申の條に、宣宗が成國公朱勇と禮部尚書胡濙とを遣して彼を萬行妙明眞如上勝清淨般若弘照普應輔國顯教至善大慈法王西天正覺如來自在大圓通佛に封じたことをいう。大慈法王は實はこのときから始まるのであるが、三大法王のうち彼のみが永樂時代に封ぜられず、宣德になつて封ぜられ、彼がツォンカパの弟子であつて教團の最高の統率者ではなかつたからであろう。それにしても結局法王に封ぜられたのは、やはりその實力を認められたからに他なるまい。その意味で清涼志卷八釋迦也失傳に、

至於宣廟、尤加欽崇、禮出常格。

といっているのは確に當つていと思われ。

彼が今回は何時中國を離れたかは明かでない。しかしシ

グメは彼が八十二歳で乙卯の年に世を去つたという（橋本二一四頁）。彼はツォンカパより稍々年長といわれるからツォンカパの生年一三五七年から見れば、一三五四年の生れで、死去した乙卯の年は一四三五年（宣德十年）となる。ヴァイセルには（*VS. p. 118*）

再びチベットに赴かれる途中、ゾモガル *Mdso mo sgar* において逝かれたり。

とあり、セラには歸りつかなかつたらしい。宣德九年に入朝して十年に歿したのであるから當然このようなことはあり得るであらう。實錄正統二年十月辛酉の條には、釋迦也失の徒弟禪師「領占」*ling tsian* *lin chen* が來朝し、駝馬及び方物を貢したことが述べられているが（史料一三七頁）、恐らくこれは前々年にシャムチェンが歿したことを傳えに來たものに相違あるまい。更に實錄正統七年八月辛亥の條には、河州西寧寺の處の官員軍民に下した勅に（史料一五二頁）

今以黑城子廠房地、賜大慈法王釋迦也失、蓋造佛寺、賜名弘化、頒勅護持本寺田地、山場、園林、財產、孳畜之類、所在官軍人等、不許侵占騷擾侮慢、若非本寺原有田

地山場等項、亦不許因侵占擾害、軍民敢有不遵法者、必論之以重罪。

というのがある。黒城子廠房地を今直に確定することはできないが、何れ河州、西寧付近の或る地點であり、チベット文獻のいうゾモガルの地がこれに當るのであろう。シャークァイシーにその土地を賜うというが、ジャムチェンは既に歿した後であり、恐らくこれは遷化のその地に遺徳顯彰のために一寺を建立することを許可したものと考えられる。ヴァイセルは (VS. p. 118) 大ケンボ・シャークァツルチムバ Mkhän chen Gälkyä tshul khriṃs pa がゾモガルに寺院を建てたことを述べて、このことを證明している。實錄天順四年五月甲午の條には、弘化寺の禪師刺麻領占に廩米を月に六斗與えたことが出ているが (史料二一七頁)、この領占は正統二年に入朝した領占と同一人である。同じく辛丑の條に河州西寧鎮守内外の官員人に勅して (史料二一七頁)。

弘化寺頒賜金字華嚴經六部並像從等物、及大慈法王等寫
 完金字經二藏、硃墨字語錄經藏、安置于内、特賜勸募
 持、爾河州西寧鎮守内外官員並諸色人等、各宜尊崇虔

敬、不許私借觀玩、輕慢褻瀆、致有損壞遺失、敢有不遵、朕命治之以法、爾等其慎之毋忽。

といつてゐるのは、やはりこの寺がジャムチェンの終焉の地であることを暗示するものである。

八

以上でジャムチェンについての記述を終り、次にその系統が如何になつたかを述べよう。先ず注意すべきは實錄正統十一年七月乙酉の條に「烏思藏大慈法王徒杲築瓦簡參藏卜等」の入朝を記していることである (史料一七二頁)。

この杲築瓦 Xau tsy na は Bkah bcu pa であり、簡參藏卜 can ts'am tsang pu は Rgyal mtshan bzän po であろう。とすればこの人物は、當然初代ジャムチェン、二代ダルギェサンボ Dar tgyas bzän po を承けてセラ寺の管長となつた第三代ギェンツェンサンボに外なるまい。ヴァイセルには、この書の書かれたときまでのセラの管長の名が順を追うて記されているが、それらには年代が殆ど入っていない。唯珍らしくもこの第三代についてのみは、癸亥の年に生れ、六十八歳庚午の年に歿したと記しているが

(VS. p. 118—119)'. 今この正統十二年(一四四六)を差
 挟んで考えれば、癸亥は一三八三年、庚午は一四五〇年に
 比定できるであろう。

ギェンツェンが如何なる理由でこのとき入朝したかは明
 かでない。ジャムチェンは既に歿しており、他の例のごと
 くれば大慈法王は當然セラ系の彼によつて繼がれねばなら
 ない。しかし彼は單に「宴並びに鈔綵段僧衣等の物を賜つ
 た」だけで朝廷から退出した。大慈法王はかくして一代限
 りを以てその封は終つたのである。もともとジャムチェン
 が成祖に厚遇を受けたのはツォンカバの代理としてであつ
 た。厚遇とはいつてもそれは西天佛子の位であり、法王に
 次ぐ程度のものであつた。法王に封ぜられたのは宣宗の時
 代に再來したときである。恐らく宣宗はその再來に對する
 報賞としてこの高位を彼に與えたのであろう。しかもこの
 ときはガンデン Dge'u Idan は勿論のこと、レボン Hbras
 spuus の大寺院も既に開基されていて、彼のみがゲルグバ
 の諸管長のうちで特に待遇されるいわれはなかつたのであ
 る。宣宗の法王位の授與は景泰中の沙加〈Gakya に對す
 る大善法王、正徳中の緯吉我些兒〈Chos kyi 'jod zer に

對する大徳法王の授與と大して變りはない事例と見てよい
 と思ふ。ツォンカバ歿後のゲルグバの勢力はカルマバやサ
 キヤバ等と同等の待遇を受ける程の力は未だ具わつていな
 かつた。それはカルマバの壓迫を避け、バグモドゥバの保
 護を受けて漸く存立し得た宗派であつて、チベット政局へ
 の影響力等は到底この際は問題にならなかつたのである。

ゲルグバが再び朝廷の注意を引くようになったのは、萬
 曆時代に第三代ダライにトメットのアルタンカーン Altan
 gagan が深い歸依を致してからである。それまでは朝廷
 とゲルグバとの關係は史上には明確に跡を辿ることはでき
 ない。少くとも明確に跡を辿ることはなされていなかつ
 た。しかし實録を仔細に點檢すると、この空白の期間でも
 若干のゲルグバの僧は朝廷を訪問して、その聯絡を斷たな
 かつたのである。

實録景泰二年六月辛未の條には、「烏思藏些獵寺緯吉監
 察」が使者を遣して入貢している(史料一九四頁)。些獵
 sie lig は Se ra、緯吉監察 ts'iau tsi tchien ts'an は常
 識的には Chos kyi rgyal mtshan と還元できる。唯「
 の景泰二年(一四五一)はセラ寺第三代のギェンツェンサ

ボの歿した翌年であり、緯吉監祭は一應第四代のケーパ・タギヤム Mkhas pa Bkra rgyam (VP, p.119) を指すと思なされるかも知れない。しかし Bkra rgyam はトゥッチ氏の記すごとく當然 Bkra cis rgya mtsho で (TPS, Genealogical Tables, F) 漢字音とは一致しない。従つてやはり第三代がチョエジェ・ギエンツェンサンボ Chos rje rgyal mtshan bzah po と呼ばれていたことと思ひ合せて、これを第三代を指すものとし、彼の命を受けて使者が出され、その後間もなく年内に彼は世を去り、使者は翌年明廷に到着したものと見たい。

同じく正統十四年四月戊午の條には、「四川烏思藏麥思奔等番僧刺麻倚什藏」が來朝したことをいうが(史料一八七頁) 麥思奔 *mar si puen* は Hbras spuñs^⑤ 倚什藏 *i si tsau* は Ye ces bzah (po) と還元すべき^⑥。同じく成化七年十一月辛丑の條を見ると、「烏思藏葛丹等寺聚番僧」が來朝しているが(史料二五九頁)、葛丹 *ko tan* は Dgah Idan^⑦ と考えられる。同じく十六年五月丙申の條「烏思藏割失倫卜等番僧端藥藏卜」の來朝については(史料二八〇頁) 割失倫 *tga si lya pu* は Bkra cis lhan po^⑧

端藥藏 *ten iau tsau pu* は Don yod bzah po と還元できるであろう。しかしこれらは實録による限り、何れも唯一回の例であり、極めて散發的で繼續性のない朝貢である。これも結局本地のゲルグパが常時使節を派遣する力を持たなかつたことを證明しているものに外なるまい。

チベット本地のゲルグパは右のような程度の取扱しか受けなかつたが、北京に在住したゲルグパは必ずしもそうではなかつた。シグメはジャムチェンの弟子ニェタンバ法主アモガバ *Sne than pa chos rje Amogha pa* とニェナムシェラブ *Bsod nams ces rab* の二人が宣徳帝の帝師となつたことをいうが(橋本二一六頁) 此のことはヴァイセルにも (VS, p.118) 弟子アモガ *A mo gha* とニェナムシェラブ *Bsod nams ces rab pa* は天子の帝師 *Ti crhi* となり、この二人の弟子シヨムツペンデン *Gshon nu dpal Idan pa* も天子の深い歸依處 *Bla mchod* となれり。

とある。アモガの來朝の時期については、シグメは辛丑の年(一四二二)にジャムチェンに皇帝の招請が出されたとき、ソェナムとともに隨從して來たという(橋本二一四

頁)。しかし一方實錄宣德元年三月庚子の條には(史料七
七頁)、

陞烏思藏大寶、大乘、闡化、闡教、贊善五王及大國師釋
迦也失差來使臣阿木葛、灌頂淨修弘智國師、鎮南星吉爲
灌頂國師、俱賜二品金銀印。

とあり、この阿木葛。Hu ko は明かに Amogha でジャ
ムチェンの弟子ではあるが、そのときの都合により五教王
の使も兼ねて遣使されたこととなつてゐる。従つてこのと
きの來朝はジャムチェン自身のことではなく、アモガの入朝
であり、それがチベット側では誤つて傳えられたのであろ
う。事實ジャムチェンは前に述べたごとく宣德九年には確
に入朝しているが、六年には何等中國史上に姿を見せては
いないのである。

又前にも觸れたが同じく六年九月壬寅の條には、大乘法
王クンレーパが「國師阿木葛」を遣して馬及び方物を貢し
たといひ(〔上〕六六頁)、同じく十月壬戌には「烏思藏
國師阿木葛等」に銀鈔綵幣表裏等を賜つたことをい
う(史料八〇頁)、三月入貢のアモガと別人のようにも見え
るが、多分同一人と考えられる。ついで實錄正統四年五月

己巳の條には「國師亞蒙葛」に加封して西天佛子大國師と
なしたことが見えるが(史料一四〇頁)、ジャムチェンの
西北方面での客死により、彼はその後繼者と見なされたの
のであろう。續く六年甲寅の條には、「大慈恩等寺公住國
師禪師刺麻阿木葛等」の語が見えるから、彼はその後ずつ
と北京に滞在することが許されたのであろう。この間に彼
は充分朝廷の信任を捷ち得て、前述の正統七年八月の弘化
寺の建立(八三頁)の推進者となり得たと考えられるので
ある。しかし彼がチベット文獻にいうような帝師に任ぜら
れたということは中國側の記録にはない。勿論帝師等とい
う稱號は明代には何人にも與えられなかつたのが事實であ
る。

九

アモガとともに入京したソナムシエラブについては、
實錄には若干の記録が残つてゐる。同書正統十一年辛卯の
條に(史料一六九頁)、

大慈恩寺僧吒失巴、爲其師灌頂國師鎮南釋刺、求襲爲師
祖西天佛子大國師……不允。

とあるが、鎖南釋刺 suo nam si la は明かに Psod namis ces rab である。アモガと同じ大慈恩寺の僧であるからにはジグメに出るソエナムシエラブと同一の人物と見なして差支えあるまい。師の西天佛子大國師を襲わんことを願つたのは、多分この頃、正統四年五月にこのような稱號を與えられていたアモガが歿したためであろう。ついで實錄景泰四年四月辛亥の條には（史料一九九頁）、

命灌頂大國師沙加爲西天佛子大國師、灌頂國師鎖南釋刺爲灌頂大國師、賜之誥命。

とあるから、彼は七年後灌頂大國師に任ぜられ、景泰七年七月に沙加 sa ta ra / Cakya が大善法王となり、ソエナムシエラブは漸くこのとき西天佛子になつたのである（史料二〇七頁）。

アモガとソエナムシエラブ兩人の弟子というシヨヌウペンデンも實錄のうちにその名を發見できる。同書成化十五年閏十月丙子の條には（史料二七八頁）、

太監李榮傳奉聖旨、陞大慈恩寺國師乳奴班丹爲灌頂大國師。

とあるが、乳奴班丹 ky nu puan tan は明かに Gsion

nu dpal ldan である。シヨヌウのその後は實錄成化十八年十一月甲辰の條に（史料二八七頁）、

太監覃昌傳奉聖旨、大慈恩寺灌頂大國師割失堅剉、乳奴班丹、俱陞西天佛子。

とあつて西天佛子となり、成化二十年十一月丙戌の條には（史料二九一頁）、

太監覃昌傳奉聖旨、陞大慈恩寺西天佛子割失堅剉、乳奴班丹、大能仁寺西天佛子鎖南堅參、結幹領占、俱爲法王。

とあつて法王となり、異常の昇進ぶりを示している。勿論時代が、ラマ教愛好者の憲宗の時代であるから、このような速かな昇進が可能であつたので、彼自身がそれ程優れた人物であつたのかどうかは分らない。

以上によつて、ジグメに記された在京ゲルグバの系統のものには皆中國文獻に見出し得るが、この後も彼等の系統は朝廷の庇護で榮華を極めたいらしい。彼等の居住した大慈恩寺がもはやゲルグバの寺院化したことは疑えないところであるが、この寺院名を手がかりとして進むと、尚二三の法王、西天佛子の例が見出される。

第一は實錄成化二十二年十月庚辰の條に（史料二九八頁）、

太監韋泰傳奉聖旨、陞大慈恩寺西天佛子捨刺吉……爲法王。

とあるもので、捨刺吉 *she la tsi* は *Ces rab skyid* と考えられる。

第二は同じく正徳五年六月壬辰の條に（史料三四〇頁）、

大慈恩寺佛子乳奴領占、捨刺扎、俱爲法王。

とあるもので、乳奴領占 *zy nu ling tsem* は *Gshon nu rin chen*、捨刺扎 *she la tsa* は *Ces rab grags* と還元できる。兩者ともに、同年四月戊戌の條に（史料三三九頁）、

大慈恩寺乳奴領占爲西天佛子、革職國師捨刺扎爲佛子、刺麻也舍窩爲禪師。

とあるから、西天佛子、佛子となつて約二か月の後に法王に昇進したのであつて、勿論背後には武宗の熱狂的なラマ教愛好の氣分が働いているのであろう。同じく正徳七年十一月戊戌には大慈恩寺の「法王」が僧房を修築せんとし、工部は「民窮財盡」を以て反對したが、武宗は聽かなかつ

たという（史料三四四頁）。この法王は乳奴領占、捨刺扎のうちの一人、或は兩人をもに指しているに相違ない。

第三に同じく正徳八年十月丁酉の條に（史料三四五頁）、大慈恩寺灌頂大國師也舍窩死、命工部造塔葬之、工料給事中謂、舊例無爲國師營葬者、工部亦據之執奏、不聽、且令遂者爲例。

とあるが、この也舍窩 *ie she no* は *Ye ces hod* で、前掲の史料のごとく正徳六年四月戊戌に禪師となつたばかりのラマ僧である。昇進の速度もさることながら法王、西天佛子にしか許されなかつた官費の造塔が行われ、それが例となつたのは、やはり武宗の特別な愛護なしには考えられない。

武宗が歿し、世宗が立つと狀勢は一變した。實錄嘉靖十一年正月丁酉の條には（史料三七八頁）、

先是右春坊右中允廖道南請、改大慈恩寺、興辟廡、以行養老之禮……下禮部議、覆言、今國子監廼祖宗以來臨幸之地、恐不必更葺梵宇舊址、重立辟廡、惟寺內歡喜佛、係胡元淫制、敗壞民俗、相應毀棄。とあり、續いてこれに對する處置を、

於是工部銷毀淫像。

という。大慈恩寺に關する實錄の記載はこれを以て終り、後は全く發見できない。恐らくこのときを以て長期にわたる在京ゲルグバの活動は終を告げたのであろう。明朝とゲルグバとの交渉は以後萬曆の時代となつて第三代ダライラマが甘州から書を張居正に送るまで暫くの間中絶の狀態に陥るのである。ジグメはシヨヌウペンデンの紹介の後に（橋本二一六頁）、

それ以來現在に至るまで、大王城北京に於て無等山なるゲーデンパ派の無垢なるもの廣く弘通するに至れり。

といつて、シャーキャイシーの項を結んでいるが、それは嘉靖以後の中絶という事態を承認した上ではじめて納得されるものである。

一〇

第四は闡化王であるが、この教主がバグモドゥッパ Phag mo gru pa であることは今更いふまでもない。第五代のラグバギエンツェンが、永樂四年三月に闡化王に封ぜられ、中國との關係が圓滿に行われたことは別稿で述べ

た。^⑧當然ここでは第六代ラグバジュンネー以後のことを記さなければならぬが、實はこの第六代からバグモドゥッパ朝は權臣の跋扈による衰頽の歴史を辿ることになる。しかしその事情を詳しく述べるのは別に機會を持つこととして、ここでは一五〇〇年代の初期までの王位の繼承の問題のみを取扱つておこう。

ラグバギエンツェンの後を嗣いだラグバジュンネーは甲午の年（一四一四）に生れ、十五歳でジュエタンの座主となり、十九歳壬午の年（一四三二）にネウドン Snehu gdon に至つてラツンとなつた（DMS. p. 65b）。實錄正統五年四月壬午の條に（梁氏本卷六六、五丁表）、

遣竹師葛藏竹昆令、爲正副使、封怕木行巴灌頂國師吉利思巴永耐監藏巴藏卜、嗣其世父爲闡化王、賜之語命錦綺梵器僧服等物。

とあり、同じく正統五年五月庚申の條には、行在戶部の奏として（史料一四二頁）

禪師葛藏奉命、帶刺麻僧徒共二十名、齎誥命勅書、牲鳥思藏、封闡化王等官。

と述べているが、葛藏 ko tsang は Bskal bzah であり、

昆令 *kuŋ liŋ* は *Kun (dgañ) rin (chen)* と還元でき
る。對應する明傳の記事は正統五年の條の

王(IIラグパギェンツェン)卒、遣禪師二人、爲正副
使、封其從子吉刺思巴永耐監藏巴藏下、爲闡化王。

であるが、吉刺思巴永耐監藏巴藏下 *té la śī pa yn *nari*
téien tseŋ pa tseŋ pu は明かに *Grags pa hbyun gnas*
rgyal mtshan dpal bzah po で、第六代のランソの人
である。マルボ史には (DMS, p. 66b)'

時に朝廷より景泰帝 *Rgyal po Gyin thas* 勅使を多く
送りて、王 *Dbañ* の誥勅を賜わり、それより取りてワ
ン・ラグパジュンネーと稱せむる。

とあり、タライ佛敎史もシャムヤンゴン景泰帝 *Hjam*
dbyans gon na Kyen thai から誥勅を與えられて、ワ
ン・ラグパジュンネーと稱したことをいうが (TPS, p.
639) 彼と景泰帝とは何の關係もない。というのは右のご
とく、彼が闡化王に封せられたのは正統五年であり、英宗
の時代であつて、後述のごとく彼は正統十年(一四四五)
に歿しているからである。景泰帝は明かに正統帝の誤でな
ければならない。

ところで正統五年(一四四〇)は第五代の死からは八年
後であり、その封は些か時間がかかり過ぎている感がする
が、後繼者の決定についてはこの間に複雑な経過があつ
た。事實はラグパジュンネーの父サンジュギェンツェン
Saŋs rgyas rgyal mtshan が即位を希望し内紛が起つた
と云ふことであるが (TPS, p. 639) その事情は後に又觸
れる(九二頁)。テブユンによればラグパジュンネーは寛
容な人物であつたが、デンサテル *Gdan sa mthil* の座主
の地位を非常に神聖なものと考えていたために、その地位
に自らは就かず、彼の去つた後デンサテルは二十年も空位
であつたといふ (BA, p. 594)。中國の記録では、實錄の
正統十年六月に割失星吉 *tsa si siŋ tsi* (Bkra' gis sen
ge を使者として遣したことが出ているだけで、他に、何
等彼に關する記事はない。

ラグパジュンネーはマルボ史では乙丑の年(一四四五)
に歿したが (DMS, p. 67a) 實錄では正統十一年(一四
四六)六月己亥の條に關係記事があり(史料一七一頁)。
故吉刺思巴永耐監藏巴藏下父桑兒結監藏巴藏下、借襲闡
化王。

とあつて、禮部が遣官してこれに賜物があつたことをいう。桑兒結監藏巴藏卜 saṅ q̄l t̄q̄ie t̄q̄ien t̄saṅ pa t̄saṅ pu は Sans rgyas rgyal mtshan dpal bzah po で確にラグパジュンネーの父のサンジエギエンツェンに一致する。唯ここで注意しなければならないのは、彼が闡化王を「襲した」とあることである。マルボ史はサンジエについて (DMS, p. 67a)'

〔第六代は〕御年三十歳を経たる癸亥の年(一四四三)にヤルギヤブ Yar rgyab より御父 Yab che ba を大なる尊敬もて請導し、ツェタンの管事官 Rtse than nan po に坐することを願えり。

とあり、又同じく第七代クンガレグ Kun dgah legs の條には (DMS, p. 67b)'

丁丑の年(一四五七)にサンジエギエンツェンは逝けり。この御父はヤルギヤブに九年、ツェタンの管事官に十五年住したりという。

とあつて、彼がツェタンの管事官となつていたことをいつている。このことはラグパジュンネーが、父をこのように待遇することにより、自己の即位以來の紛争を解決したこ

とを意味する。しかしサンジエギエンツェンは自らの宿願を抛棄したわけではない。ラグパジュンネーが若くして一四四五年に歿したのは彼にとつて絶好のチャンスが到来したことになる。一四四五年にはラグパの伯父等即ちサンジエの兄弟はすべて歿しており、ラグパの弟のクンガレグは漸く十三歳で、翌年はじめてツェタンの座主になるような始末であつた。従つてバグモドウには適當な後繼者がなく、俗人のサンジエが就任したのであるが、それが「假に襲つた」とされているところに、バグモドウ宮廷の内部に強硬な反對があつたことを示していると思う。明傳は、王(=ラグパジュンネー)卒、以桑兒結堅督巴藏卜嗣。といひ、同じく成化五年の條には、

王(=サンジエギエンツェン)卒、命其子公葛列思巴中奈領占堅參巴兒藏嗣。

といつて、サンジエを闡化王の一代に數えこんでいるが、これは「借襲」という條件付の闡化王であるのを見落している。

ところで問題は次のクンガレグが何時後を嗣いだかということである。マルボ史には彼がツェタンの座主になつ

た後を續けて (DMS. p. 67b)。

それより三年經たる戊辰の年 (一四四八) にツェ (|| ネドンツェ) に到りたり。

というが、「ツェに到つた」ということは彼がネドン (|| ネウドン) で王位に即いたということである。このことは實録にも若干反映していて、景泰二年七月甲辰の條に (史料一九四頁)。

闡化王並都指揮僉事同加里堅察巴藏卜、遣番僧刺麻割実新吉等、貢馬及方物。

とあり、同じく三年正月辛酉の條に (史料一九六頁)。

烏思藏闡化王遣番僧完卜鎖南領占、來朝貢馬及貂鼠皮。

とあるに拘らず、八月丁丑に割實新吉が辭歸せんとしたときには (史料一九四頁)。

命賽勒紉幣表裏、歸賜其闡化王昆葛列思巴永耐堅察巴藏卜。

であつて、事實としてはこのときの闡化王は明かにクンガレグであることを示しているのである。従つて同じく天順元年三月癸未の條に (史料二一〇頁)。

烏思藏怕木竹巴灌頂國師闡化王桑爾結堅咎巴藏卜等、來

朝貢馬及方物。

とあるのは、勿論サンジエ自らの入朝ではなく、ラツン代理としての彼の使者の入朝であると考えなければならぬ。

しかしマルゴ史には、その後サンジエが丁丑の年 (一四五七) までツェタンの管事官であつたことを述べており、中國文獻がやはりこの年まで「闡化王としての」サンジエの朝貢をいつていることからしても、クンガレグに實權が完全に移つたとは思われない。そこで實録を見ると、成化五年正月辛巳の條に (史料二五三頁)。

命灌頂國師闡化王桑兒結堅參叭藏卜、闡化王領占叭兒結參男領占堅參叭兒藏卜、輔教王南葛堅參巴藏卜男葛割失堅參叭藏卜、各襲其父封爵。

とあつて、闡化王、輔教王とともに闡化王の新たな相續が語られている。しかし闡化王のみがここでは相續者の名が見えず、奇異の感に打たれるのであるが、恐らくこれは前掲の、景泰二年八月にクンガレグの名を闡化王として出し、ついで天順六年三月にはサンジエの名でそれを出しているため、その繼承の順が理解できなくなり、ここに至つ

てクンガーレグの名を書き込みかねたのであろう。これは明傳に、

〔成化〕五年、王（||サンジェエンツェン）卒、命其子公葛列思巴中奈領占堅參巴藏卜嗣。

とあるのと考え合せて、實録の文は桑兒結堅參叭藏卜の下に、「男昆葛列思巴」の名を補つて差支えないと思う。とするとクンガーレグが正式に闡化王に封ぜられたのは成化五年（一四六九）以後ということになるが、マルボ史には戊辰の年（一四四八）に位に即いたと述べているのであるから（九三頁）、勿論この間はバグモドウの當主はクンガーレグその人でなければならぬ。そのことを證據立てるために尚實録から二三の重要な記事を引用しよう。

その第一は天順元年（一四五七）九月辛巳の條に、正使灌頂國師葛藏、副使右覺義桑加瓦を遣して輔教王を封じたときに（史料二二二頁）、

所經烏思藏等處闡化王昆葛列思巴中耐堅參巴藏卜等、俾其護送使臣。

とあるものである。このうち葛藏 ko tsang < Bskal bzang は一四三二年に入藏した葛藏であらうし（九〇頁）、桑加

瓦 say tga na は Sa skya pa でなく、Sams rgyas ba である可能性が強い。而して昆葛列思巴中耐堅參巴藏卜 kuen ko jie st pa tsung *na tchien ts'arn pa tsang pu は Kun dgah legs pañi hbyun gnas rgyal mshan dpal bzang po で、明かにクンガーレグその人である。

第二の史料は天順八年（一四六四）七月辛巳の條に（史料二二二頁）、

烏思藏闡化王公加列巴宗念堅燦八藏卜等、遣番僧常竹領占……來朝貢馬及方物。

とあるもので、常竹領占 tsiang tgyi ling tsiem は Bryan chub rin chen、公加列巴宗念堅燦八藏卜 kuj tga jie pa tsung nien tchien ts'an pa tsang pu は第一の史料のクンガーレグの名に完全に一致している。

この二つの例により、クンガーレグがサンジェの歿後ネウドン¹の王位を占めたことはもはや疑なく、明傳、實録に成化五年に即位したごとく記すのは、唯單に明廷から闡化王に正式に封ぜられたことをいつているに過ぎないことが分る。マルボもその點は正直に（DMS, p. 67a）

シナの成化帝 Chih ho rgyal po は勅使を遣して王

Dhan の誥勅を賜りたるにより、ワン・クンガーレグバと稱せらる。

といつて、封號を與えられたのは成化時代であることを明かにしているのである。

一

ところでクンガーレグの後繼者についても問題は少ない。實錄ではその後成化、弘治にかけて頗る多くの闡化王の朝貢を記している。しかし王の名は全く記さず、弘治十年（一四九七）十二月壬午の條に至つて突然（史料三一九）

初烏思藏闡化王死、其子班阿吉汪東劄巴乞襲封闡化王。

と出てくる。班阿吉汪東劄巴 *puan o tē uan t'su tsa pa* は *Dpal nag gi dhan phyug grags pa* で、普通ガーギワンポ *Nag gi dhan po* と稱される人物であるが、クンガーレグが王に封ぜられた成化五年よりこの弘治十年頃まで、バグモドゥバには變動が全くなかつたのではない。詳細は省くが、實はクンガーレグの在位中には宮廷には内訌が絶えなかつたのである。マルボ史によれば、彼は三十五

歳のとき丁亥の年（一四六七）に自らの子ドルジュリンチェン *Rdo tje rin chen* をツェタンの座主に任じたが^⑥ (*DMS*, p. 68a)。⁷ ドルジュリンチェンは十九歳で亡り (*ibid.* p. 68b)。⁸ 遂に父の後を嗣ぐことができなかつたといふ。彼の十九歳が何年に當るかは明かにすることができないが、テポゴン⁹は彼を現在の座主として記しており、次代の王ガーギワンチュが位に即いたのは一四八一年であるから、一四七八年から八〇年までの間であることは確實である。而してその母のチョェルサンモ *Chos dpal bzhan mo* も次いで亡り、クンガーレグの直系はここに絶えてしまつたのである。

クンガーレグがついで自らの後繼者としたのはガーギワンチュであるが、トゥッチ氏はこれをドルジュリンチェンの子と見なしている (*TPS. Genealogical Tables*)¹⁰。しかしポティセルウII問答第十一には (*PTSR*, p. 54b)¹¹ ラグジュン *Grags (pa) hbyun (gnas)* の御子はギワン *Gi dhan* にして、その御子は大モンマ *Gon ma chen po* なり。

とあり、ギワンは明かにガーギワンチュの誤寫乃至は略稱

であり、大ゴンマはその子のタシーラグパ *Bkra cis grags pa* を指しているから、ガーギワンチュは第六代ラツン・ラグバジュンネーの子である(一〇一頁第三表参照)。又マルボ史には (DMS. p. 69a)'

ツェガーリンボチェ *Tshes lha rin po che* はカルバ *Mkhar pa* の女と婚し、それよりドンギユエ・ガーギマンボ *Gdun rgyud Nag gi dban po* 己未の年(一四三九)にキャンツェにおいて生れたまえり。ツェガーパの二十六歳のときにして、又クンガーレグパワの七歳のときなり。

とあり、ツェガーリンボチェ即ちラグバジュンネーの子としている。ダライ佛敎史も同様、ツェガーバの子であるというから (TPS. p. 640) 'この點はチベット文獻は一致していて矛盾がない。トゥッチ氏の系圖ではガーギワンチュはクンガーレグの孫になるが、クンガーレグは一四三三年生れであり (一〇〇頁註⑧) '一四三九年は確に右のマルボ史の文のごとく七歳であつて、孫の存在する理由はない。

ガーギワンチュは十六歳甲戌の年(一四五四)にクンガ

ーレグの請によりデンサテルの座主の位に就いた (DMS. p. 69a, BA. p. 595) '。チェンガ・ソエナムギェンツェン (||ニルニール *Ner gñis pa*) が一四三四年に歿してから二十年の間、ガーギに至るまでデンサテルの座主は空席であつたのである。

彼が二十歳を過ぎた頃からバグモドゥには又しても内紛が起り、リンブン侯 *Rin spun pa* の反亂等があつて政局は極めて不安定となつた (DMS. p. 70a) '。彼が王(||ゴンマ)の位に即いたのは一四八一年である。マルボ史には (ibid.) '。

座主(||ガーギワンチュ)はツェの高御座に即かれ、ゾンカワ *Rdson Kha ba* の女を妃として懸けられたり。そのとき座主は四十三歳にして、この年にオンダセルカンツェ *Hon ndah gsal khar tse* にゴエロツァワ *Mgos lo tsha ba* 逝きたり。

とあるが、ガーギの四十三歳は一四八一年で、ゴエロツァワ即ちテプゴンの著者シオンヌウペルの歿した年に一致するのである。ガーギワンチュが四十三歳でゾンカワの女を娶つたことは一見奇異に感ぜられるかも知れない。しか

しダライ佛教史には、「このときラン氏の系統を伝えるものが他になくなり、止むを得ず彼が皆の獎に従つて結婚したのである」と説明している (TPS, p. 640)。

ガーギの即位後三年、癸卯の年 (一四八三) にクンガールは五十一歳で歿し (DMS, p. 71a)、漸くガーギは名實ともに王となるが、己酉の年 (一四八九) には妃ツォンカワ氏を失ひ、辛亥の年 (一四九一) には五十三歳で又自らが世を去るのである (ibid.)。普通彼はツェニリンポチ *h* Tshes gñis rin po che と稱されるが、それは彼がこの年の六月の二日 Tshes gñis に歿したことによつてい

彼の後を嗣いだしたのはその子ワン・タシーラグバ *Dhat* *Bkra cis grags pa* である。その生年はマルボ史によれば、トゥッチ氏の推定する一四八〇年 (TPS, Genealogical Tables) ではなく、戊申の年 (一四八八年) である (DMS, 71a)。彼に對する、王としての天子の誥勅の授與については、マルボ史には (DMS, 71b)。

朝廷よりの官人は、座主 *Spyan sha* が在位せるものと思ひて、王 (に封ずる) の勅を持ち來らず、諸々の賜

物を、敬禮してもて獻置し、勅使等は歸りたるが、それはこの年なり。

とあり、明の使者がチェンガ即ちガーギワンチュが在位しているものとして、タシーラグバへの闡化王の封勅を持参しなかつたことをいつている。ダライ佛教史にも (TPS, p. 640)。

そのときシナの天子はチェンガ (|| ガーギワンチュ) に、ワンに封ずるの勅を與えんとせしが、チェンガの死したるにより、勅使等は賜物をすべて置きて歸國せりとある。マルボ史の「この年」というのは、その前文よりして癸丑の年 (一四九三) と判断されるか、何故このときに限つてこのような行違ひが起つたのであろうか。この疑を解くために我々は實錄弘治十年十二月壬午の興味ある記載を一應検討してみよう (史料三一九頁)。

初烏思藏闡化王死、其子班阿吉汪東剌巴乞襲封闡化王、上命番僧刺麻參曼客實哩爲正使、鎖南窩資爾副之、同刺麻剌失堅參等十八人、共齋誥勅並賞賜綵段衣服食茶等物、往封之、行三年至其地、時新王亦已死、其子阿汪剌失剌巴堅參巴班藏卜、即欲受封、並領所齋誥勅諸物、參

曼答實哩等不得已援之、遂具謝恩方物、並其父原領禮部
勘合印信圖書番本、付參曼答實哩等贖回、爲差驗、至四
川、巡撫官劾其擅封之罪、逮至京坐斬、至是屢奏乞貸
死、上以爲番人不足深治、特免死、發陝西平涼衛充軍、
副使以下宥之。

最初のガーギワンチュの乞襲のことについては前にも述べ
た(九五頁)。ここに出てくる使者の參曼答實哩 ts'am vuan
ta si li は Samantacrī 鎖南窩資爾 suo nam no ts'i
ʒl ʒ Bod nams hod zer 割失堅參 tsz si tšien ts'am
は Bkra cis rgyal mtshan であり、阿汪割失巴割堅參巴
班藏 o naŋ tsa si tsa pa tšisn ts'am pa puan tsaŋ
pu は明傳の阿往割失割巴堅參で Nag dhan bkra cis grags
pa rgyal mtshan dpal bzah po であろう。この文は匆卒
に讀むと、襲封とそれに關する事件が弘治十年(一四九
七)に起つたごとく見えるが、襲封に關しては冒頭に「初
め」とあり、サマンタシュリー等が「是に至つて」死を貸
されんことを乞うたことからして、サマンタ等が歸國して
彈劾され、その治罪が行われたのが弘治十年十二月であつ
たことが分る。そこでこれらの使者が何時出發したかとい

うことが問題となるが、ガーギワンチュの封爵のために出
發したのであるから、クンガレグの歿年一四八三年から
ガーギの歿年一四九一年の間ということになるであろう。
「行くこと三年にしてその地に至る」といい、至つた年が
マルボ史のいう一四九三年であるとすると、一四九〇年—
九一年に彼等は朝廷を出發したのであろう。歸國にも又三
年費したとすれば、一四九五—九六年に彼等は中國に歸着
したことになり、一四九七年の治罪と矛盾なく年代は接續
することになる。明傳には、弘治八年の或る事件の後に續
いて、

・其時王卒、子班阿吉江東割巴請襲、命番僧二人、爲正副
使、往封云云。

とあつて、實録と同様の始末を述べ、恰も弘治八年(一四
九五年)に王の交代又は使者の治罪が行われたごとくいう
が、事實は右のような經過を辿つたものとしなければなら
ないのである。

ところで右の實録の文によると使者等は止むを得ずして
封を授けたことになり、マルボ史では贈物だけ受領して封
は受けなかつたことになり、ダライ佛敎史ではとにかく封

勅は持参していたが、やはり授けなかつたことになる。しかし使者等が後に擅封の罪を問われているところを見ると、朝廷はこの封を認めなかつたのであろう。マルボ史には (DMS. p. 73b)'

壬申の年 (一五二二) の末に朝廷より禪師 Chin cñi と國師 Go cñi 主従等多く使者として來り、ツェに王 Dhan の封勅賜わりたり。

とあつて、後一五二二年 (正徳七年) に正式に闡化王とされたことをいうが、中國側にはこれに該當する記事は見出し得ない。しかし前述のごとくタシーラグパは一四八八年に生れたのであるから、サマンタシュリー等が至つたとき一四九三年には僅に六歳で、王に封ぜられるには餘りにも幼い。しかし一五一二年には二十五歳で、先ずはこの年に正式に封ぜられたと見るのは妥當としなければならぬであらう。 【未完】

〔註〕

① Isak Jakob Schmidt, Geschichte der Osmongolen und ihres Fürstenhauses verfasst von Saanang Seesen, St. Petersburg, 1829, p. 291.

② 岩井大藏「西藏・印度の文化」東京、昭和十七年、一〇〇頁。

③ 明傳では「慈慧」、實録永樂十四年五月辛丑の條では「惠慈」。朱彝尊の日下舊聞考卷三九にも、成祖によつてここに番經廠が置かれたことをいい、參考として張居正の撰した碑文を掲げている。

④ L. Austin Waddell, The Buddhism of Tibet or Lamaism, London, 1934, p. 63.

⑤ 實録宣徳六年二月辛亥の條にシャークヤイシーの使者刺麻羅卓促密が來朝貢物したことをいう (史料一一一頁)。羅卓促密 Luo tsuau tsy mei は明かに Blo gros mtshu mi である。

⑥ シグメによればジャムチェンの第二回の入京は次のごとくである (橋本二一四頁)。辛丑の年 (一四二二、永樂十九年) に成祖の招請状が出されたが、彼が宮城と居館の近くに來たとき帝は歿し、宣宗が即位したが、成祖時代にもまして彼は歓迎を受けた。しかし宣徳九年の謁見までには時間がかかり過ぎてゐるし、成祖の末期から仁宗を経て宣宗の初期までにジャムチェンが入朝した記録はない。このシグメの記述は誤である。

⑦ 明傳では「普慧」。

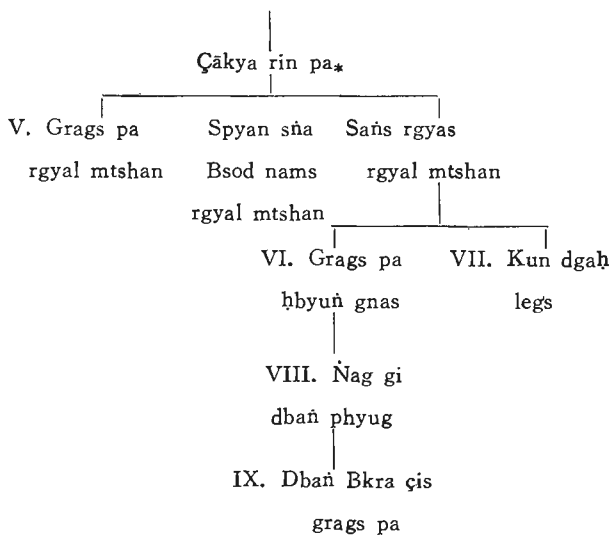
⑧ トウッチ氏はやはりツァイセルによつて、第二代をシャークヤルチム Galya tshul khirms とつたが (TPS. Genealogical Tables, F) 原文の讀誤りと考えられる。シャークヤルには明かにジャムチェンのセラ寺建立の後に (VS. p. 118)'

カンチュマワ・タルギェサンボ Dkañ bou smra ba Dar

- rgyas bzah po を教主 Gdan sa に任じたり……座主には
ターヌ・タルサン Mkhas pa Dar bzah の後に無比の法
主キェンツェンサンポ [到れり]。
と記している。
- ⑩ ガンデンの開基については註⑨、レポンのそれについては註
⑪参照。
- ⑪ レポンの創設は、ヴァイセルには丙申の年（一四一六、永
樂十四年）となつてゐるが (VS. p. 91) その創設者はマ
ンカンの弟子シキヤンチョシヤンチョシヤン dnyans chos rje
Bkra gis dpal ldan pa འཇམ་མཉམས་པོ་འཇམ་མཉམས་པོ་ (ibid.)。その簡単な歴史と
参考文献については GHP. p. 96, fn. 75 参照。
- ⑫ 實錄天順五年四月己丑の條には「烏羅藏麥用等寺都綱刺麻也
失言干」が來朝したことをいふが、その麥明 mar p'ug を正
しいものとすれば、やはりレポンを指してゐるのじやな
う。也失言干 ie si ien tsien は疑もなく Ye ges rgyal
mshan འཇམ་མཉམས་པོ་。
ガンテン寺はツェンカン自身によつて一四〇九年（永樂七
年）に開基された。簡単な紹介は GHP. p. 107, fn. 107 に
行われている。
- ⑬ マンレンポ寺院はツェンカンの弟子ダゲンチュン Dge hdun
grub འཇམ་མཉམས་པོ་一四四七年（正統十二年）に創設された。創
設されて四年目にこの寺院のチヤは早くも明廷に現れたので
ある。尙この寺院に關しては簡にして要を得た紹介が GHP.
p. 144, fn. 444 に行われている。
- ⑭ 實錄景泰七年六月癸亥の條によると、彼は大陸善寺の僧であ
つた (史料二〇六頁)。
佐藤長「元末明初のチベット狀勢」明代滿蒙史研究、京都
昭和三十八年、五五四頁。
トッチ氏は乙酉の年（一四四四）に歿したといふが (TPS.
Genealogical Tables) 今はチベット史に從う。
カンガーンダの生年はトッチ氏は何も記してゐないが、チ
ベット史にみれば癸丑の年（一四三三）である (DMS. p. 67b)。
劉實新吉 tsa si shi ge འཇམ་མཉམས་པོ་ sei ge འཇམ་མཉམས་པོ་ 正統十年六
月に第六代の使者として入朝した劉實星吉と同一人物であら
う。
- ⑮ 鎮南領土 suo nam ling tsiem < Bsod nams rin chen。
明傳と對照して葛字の上に「南」が脱落してゐるものと見な
す。
- ⑯ 明傳では「班阿吉江東割田」であるが、江東は明かに汪東の
誤である。彼の名はチベット文 Nag gi dhan po (DMS.
p. 69a) チベット文 Dpal nag gi dhan po (BA. p. 595)。
チベット文 Nag gi dhan (TPS. p. 640) である。
本稿ではチベット文の字を呼ぶことにする。
- ⑰ ドルジェリンチュンはチベット佛教史には Rin chen rdo rje
dhan gi rgyal po (TPS. p. 640) チベット文 Rdo rje
rin chen dhan gi rgyal po チベット文 Rin chen rdo rje
dhan gi rgyal po (TPS. p. 640) の教主となつたことを記す (BA.
p. 1084)。
阿汪割失劉巴堅參巴班藏の「堅參巴班」は rgyal mshan
pa dpal と通元できなくともないが、實錄正徳四年九月己

〔第三表〕

パグモドゥパ系圖



* これより以前のパグモドゥパの系統については明代滿蒙史研究（註⑩掲出）所載の系譜参照。

②⑤ 亥の條に（史料三三八頁）、阿吉汪東劉失劉巴堅參巴藏ト
 o tsi nag tsi'u tsa si tsa pa tci'en ts'am pa tsang pu < Nag
 gi dbañ phyug bkra çis grags pa rgyal mtshan dpa'
 bzah po とあるのにより、巴班何れかは不要と見なす。
 マライ佛敎史にはリンブン侯がデシ Sde srid（＝パグモドゥ

パ）を攻撃したことを述べた後に（TPS, p. 640）、
 そのときシナの天子は彼（＝タシラグバ）に王の稱號と
 勅を與えたり。
 というのがこれに對應する。リンブン侯の攻撃は、マルボ史
 では一五一〇年のことである（DMS, p. 72b）。